IV-33

歩道景観構成要素が与える景観評価への影響に関する研究

中部電力株式会社　正会員　滝川真太郎
名古屋工業大学　正会員　小池　則満
名古屋工業大学　正会員　秀島　栄三
名古屋工業大学　正会員　山本　幸司

1．はじめに

本研究では我々人間にとって一番身近に都市景観を感じる歩道、特に旧用途地域制における住宅地、商業地系の歩道を評価対象とし、歩道の景観構成要素が人間の心理的景観評価に対して与える影響および、用途地域区分や季節変化（特に夏季と冬季の違い）による評価の変化を明らかにすることを目的とする。なお、ケーススタディとして名古屋市を取り上げる。

2．歩道景観評価の調査方法

2-1 評価対象の選定

評価対象としては、上述した観点より、旧用途地域制における第一種・第二種住居専用地域および住居地域、商業地域内の歩道を選定した。各対象地域において撮影した写真のうち類似性や共通性の少ないものを選ぶことに留意し、住宅地系、商業地系を各６枚ずつ、またそれぞれに対して夏季と冬季あわせて合計２４枚を選定し、評価対象として用いた。

2-2 歩道景観に関する心理的景観評価データの収集

評価対象の写真２４枚をスライドにし、それらを刺激投与としたアンケート調査を夏季と冬季の２回に分けて行った。アンケート調査票は、１４の形容詞対に関する５段階評価、歩道景観構成要素に対する印象度に関する２段階評価、好感度に関する３段階評価という３つの設問から構成した。なお、被験者は名古屋工業大学社会開発工学科平成７年度入学の学生とし、夏季は６９名、冬季は７４名に対してアンケート調査を行った。また、調査の実施に際して、評価対象であるスライドについての情報として、用途地域と季節の区別についてのみ被験者に知らせた。

3．歩道景観に対する心理的景観評価に関する分析

分析方法としては、まず歩道景観における景観評価構造を明らかにするために、アンケート調査より得られた心理的景観評価データをもとに、形容詞対評価データに関して因子分析を行う。次に、因子分析で得られた各景観評価構造に対して影響を及ぼす景観構成要素を抽出し、その実態を明らかにするために形容詞対評価データと景観構成要素に関する相関分析を行う。また、歩道景観に対する好感度による評価はどのような景観構成要素によって影響を受けているかを明らかにするために、好感度を外的基準、景観構成要素を説明変数とする数量化理論Ⅱ類による分析を行う。

4．景観評価の比較分析に対する総合的考察

因子分析、相関分析、数量化理論Ⅱ類による分析結果より、季節（夏季と冬季）および用途地域区分の差異に関する比較分析を行い、各景観構成要素が景観評価に与える影響についてまとめる。

4-1 歩道景観評価構造による比較分析

因子分析より得られた歩道景観評価構造の季節による変化を用途地域別にみると図１，２のようになる。住宅地系では夏季から冬季にかけて３因子から４因子に増えているのに対して、商業地系では４因子から３因子に減少している。この原因として歩道の利用頻度が上げられる。すなわち、住宅地系での利用頻度は一年を通して余り変化が生じないのに対して、本研究でサンプルとして取り上げた商業地系では地下街が整備されているため、冬季に比べて夏季の歩道利用頻度が高くなる傾向がある。したがって、夏季は住宅地系よりも商業地系の方が、冬季は商業地系よりも住宅地系の方が歩道に対する関心度が高くなり、歩道景観

キーワード：歩道景観
連絡先：〒466-8555　名古屋市昭和区御器所町　Tel Fax：(052)-735-5496

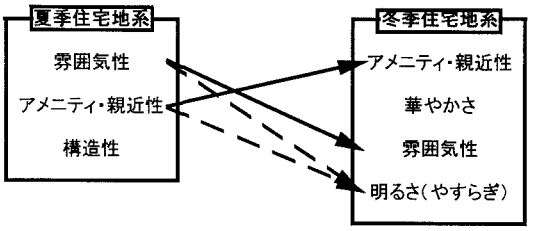

図1　季節変化による因子の変化（住宅地系）

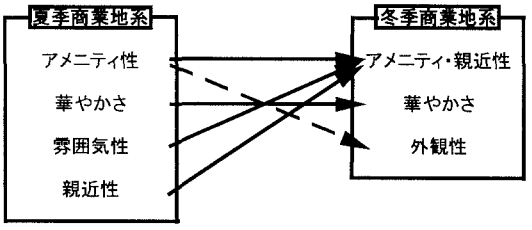

図2　季節変化による因子の変化（商業地系）

評価構造も複雑化したものと考えられる。

歩道景観評価構造を構成している因子についてみると、「アメニティ・親近性」や「雰囲気性」といった評価構造要素は用途地域に関係なく求められているが、商業地系ではこれらに加えて「華やかさ」が求められている。また、評価構造要素の変化の原因は、用途地域よりも、むしろ季節による植樹や日差しの強さの変化によるものであると考えられる。

4-2 歩道景観構成要素が与える景観評価への影響

各景観構成要素が景観評価に与える影響についてまとめると次のようになる。

①植樹については、季節や用途地域区分の違いにかかわらず、常に「アメニティ性」、「親近性」、「雰囲気性」に関する評価を向上する働きがあり、好感度に関しても常に良くする働きがあるが、住宅地系の形容詞対評価と商業地系の好感度においては夏季よりも冬季に植樹の影響力が強くなる傾向が見られた。

②舗装〔歩道路面〕については、季節や用途地域の違いにかかわらず、常に「アメニティ性」、「親近性」、「雰囲気性」に関する評価を向上する働きがあり、好感度に関しても常に良くする働きがある。

③電柱については、住宅地系特有の景観構成要素と考えられる。したがって、夏季には街並みを簡素なものに見せる働きがあるのに対して、冬季には「アメニティ・親近性」、「華やかさ」、「雰囲気性」、「明るさ（やすらぎ）」に関する評価を低下させる働きがある。また、好感度に関しても住宅地系において悪くする働きがあり、その働きは夏季よりも冬季の方が強いといえる。

④歩行者については、商業地系特有の景観構成要素と考えられる。したがって、季節に関わらず「アメニティ性」、「親近性」、「雰囲気性」に関する評価を低下させるが、夏季には「華やかさ」を増す働きがある。好感度に関しては、夏季商業地系においてのみ悪くする働きがある。

⑤自動車については、季節や用途地域の違いにかかわらず、常に「アメニティ性」、「親近性」、「雰囲気性」に関する評価を低下する働きがあり、好感度に関しても常に悪くする働きがある。

⑥雑構造物（自動販売機、電話ボックス等）については、商業地系における影響に重点を置いて考えればよい。つまり、季節の違いにかかわらず、常に「アメニティ性」、「親近性」、「雰囲気性」に関する評価を低下させ、「華やかさ」を増す働きがある。好感度に関しては、夏季住宅地系において悪くする働きがある。

以上、本研究において特に顕著な影響を示したものについて述べたが、景観構成要素の違いによって差はあるものの、明らかに季節や用途地域区分による影響があり、このことは景観設計を行う上で無視できない要素であるといえる。

5．おわりに

本研究では、各景観構成要素が景観評価に与える影響について明らかにするとともに、季節や用途地域の違いにより影響する内容に変化があることを見い出し、その実態を明らかにすることができた。今後の課題として、地域特性や季節、時間、天候等の条件を変化させて、幅広い年齢層に対して調査を行い、景観構成要素が景観評価に与える影響をとりまとめた上で、今後の景観整備のためにマニュアル化していくことが必要であると考えられる。

参考文献　1）土木学会：街路の景観設計,技報堂出版,1985.
2）花輪恒：都市景観のデザイン,鹿島出版,1989.